

生と死——ある「在目」の断想❖目次

I 死に向きあう

- 一 死についての想い 11
- 二 死生観のいろいろ 18
- 三 在日朝鮮人文学から 23
- 四 習俗・祭祀・祖霊信仰 32
- 五 死刑囚、そして自死 39
- 六 絶望から希望へ 49

II 漂泊を生きる

- 一 漂泊とは 60
- 二 放哉と山頭火 64
- 三 孤独・寂しき、そして酒 66
- 四 漂泊・放浪・遍路 71
- 五 金サッカについて 76
- 六 死を生きる——挽歌 82

III 四苦八苦をどう乗り超えるか

- 一 高齢化という時代の波 90
- 二 古典を読む 94
- 三 トルストイの『懺悔』 98
- 四 ハンナ・アーレント「孤独と寂しさは違う」 104
- 五 仏教、善に学ぶ 108
- 六 生きていくための杖、動力を求めて 113

IV 「古い」をどう生きるか——「仏教アナキズム」という考え方

- 一 死と生 120
- 二 信仰の世界 124
- 三 修行と仏教、そして政治 128
- 四 アナキズムをどう考えるのか 135
- 五 「仏教アナキズム」という言葉 142
- 六 親鸞をどう読むのか 147

V

日本語と朝鮮語——主体の揺らぎ

- 一 不遇の意識 158
- 二 植民地時代の日本語 161
- 三 「在日」にとっての朝鮮語学習 164
- 四 在日朝鮮人文学における日本語論議 168
- 五 金時鐘と金石範、日本語との闘い 175
- 六 夜間中学で日本語を学ぶオモニたち 179
- 七 日本人の朝鮮語学習 181
- 八 「在日」の母国留学 186
- 九 「在日」にとって「民族的主体」とは 191

VI

竹内好の思想に学ぶ——「在日」にとっての絶望、抵抗、敗北感の持続

- 一 抵抗の主体としてのアジア 197
- 二 「絶望」と「ドレイ」 201
- 三 竹内好の朝鮮認識 205

VII

彷徨の旅——森崎和江との対話を試みて

- 一 在朝植民者二世 227
- 二 思想の原点・原罪意識 229
- 三 日本とは、日本人とは 233
- 四 性と階級の問題 236
- 五 「日本の一人の女」へ 238
- 六 故郷・韓国への確認の旅 242
- 七 「在日」にとって森崎和江とは 244
- 八 「在日」、そして私は 251

あとがき

257

初出一覧

265